

楽曲解説

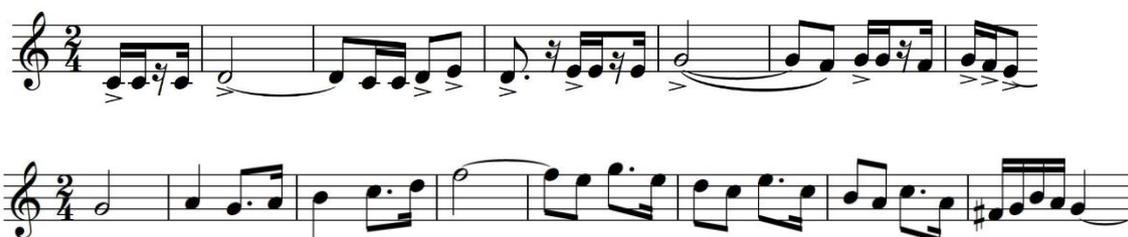
1. 戴冠行進曲『王冠』（ウォルトン）

ウォルトン（William Turner Walton : 1902～1983）は、イギリスの作曲家である。

題名の「王冠」は、むしろ「クラウン・インペリアル（Crown Imperial）」という名称で親しまれているが、その名のとおりこの曲は 1937 年、国王ジョージ 6 世（2022 年 9 月に崩御された女王エリザベス 2 世のご尊父）の戴冠式のために作曲された。

通常に行進曲は「序奏」－「主部」－「中間部（トリオ）」－「主部」で構成され、さらに「主部」には複数のマーチが組み込まれていることから、複合三部形式となっているが、この曲には序奏がなく、「主部」－「中間部（トリオ）」－「主部再現部」－「トリオ再現部」－「コーダ」という構成となっている。

主部（ハ長調）は次の 2 つのマーチで構成されている。



トリオ（変イ長調）は、一転して優雅な曲想となっている。



主部及びトリオが共に主調（ハ長調）で再現されたのち、第 1 マーチの動機をモチーフとしたコーダによって、戴冠を祝福して締めくくる。

なお、序奏こそないが、曲の形式、トリオ再現部が主調で再現される点、コーダが第 1 マーチをモチーフとしている点など、良くご存知の『威風堂々（第一番、エルガー作曲）』と姉妹作のような印象を与える構成・曲想である。

2. エルザの大聖堂への行列（歌劇『ローエングリン』より）（ワーグナー）

ワーグナー（Wilhelm Richard Wagner : 1813～1883）は、ライプツィヒで生まれた、ドイツの作曲家、指揮者であり、彼の作品といえば、舞台芸術である。ここで、上演時間が約 4 時間にも及ぶ『ローエングリン』のあらすじを、約 3 分程度で解説しよう。

今は昔、現在のベルギー国の北部にブラバント公国がありました。その国の大公には 2 人の御子がおりました。姉が公女エルザ、弟は公子ゴットフリートといいます。

ある日、姉弟は森に散歩に出かけますが、弟が途中で行方不明になってしまいました。

すると伯爵のフリートリッヒが妻のオルトルートにそそのかされ、エルザを弟殺しの容疑で訴えました。当然、エルザは無実を主張するので、決闘による神明裁判が行われることとなりました。そこでエルザは代闘士（自分のために戦ってくれる騎士）を探すこととなります。するとそこに、「mein lieber Schwan！」などと言いながら、白鳥に曳かれた小舟に乗って、銀色の鎧に身を包んだ騎士が現れました。彼の名はローエングリッヒ。遙か彼方にあるモンサルヴァート城からやってきました。そのお城の神殿には聖杯「グラール」が祀られていて、彼はその聖杯が発揮する超自然的な力に守られた徳高い戦士なのです。しかし、身分を明かすことを禁じられていたために、彼はエルザに「名前、出生などの素性を決して尋ねない」ことを約束させて、代闘士となりました。正義の力は強く、見事に勝利を収めたローエングリッヒはエルザと結婚することとなりました。

結婚式の朝、エルザは、貴婦人や童子たち（Edelknaben）に導かれて、そして、大勢の貴族、騎士らの祝福を受けながら大聖堂へと向かいました（第2幕第4場）。

そこへオルトルートが割って入り、「夫になる人の素性を、本当に知らなくていいのか？」とエルザに詰め寄ります。これによりエルザにはローエングリッヒに対して少なからずの疑念が植え付けられてしまいました。

そのような中、結婚式が執り行われます。この場面は“ワーグナーの結婚行進曲”として有名な“婚礼の合唱”です（第3幕第1場）。その後、2人きりになったエルザは、抱いた疑念に耐え切れず、ついには、ローエングリッヒに名前を尋ねてしまいました。

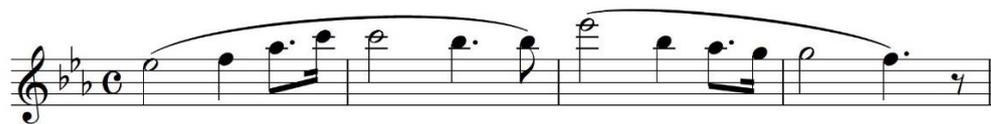
約束が守られなかったので、ローエングリッヒは帰還しなくてはいけなくなりました。

彼が身分を明かすと、またもや白鳥に曳かれた小舟がやって来ました。ローエングリッヒが白鳥の鎖を解き、祈ると、白鳥は消え、ゴットフリートが現れました。そうです。ゴットフリートが失踪した理由は、エルザに殺害されたのではなく、オルトルートの魔術によって白鳥の姿に替えられていたからなのです。そして、小舟に乗ってローエングリッヒは去ってしまいましたとき。

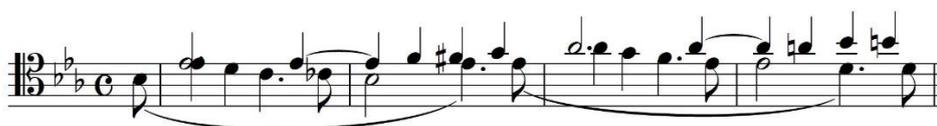
以上が簡単なあらすじである。

演目『エルザの大聖堂への行列』は、もうお分かりだと思うが第2幕第4場での音楽である（使用している楽譜は、T. A. ケネディが演奏会用に編曲したものである）。

歌劇の中ではこの部分は『Gesegnet soll sie schreiten』と題されている。舞台上では、貴族のご婦人方や童子たちが静粛で厳かに歩み（schreiten）ながら登場する。



待ち構えている貴族、騎士たちが祝福（Gesegnet）をおくる。



いよいよエルザ (sie) が喜びに満ちて登場する。



このエルザのメロディーがヴァイオリンで再現されるが、原曲では、この部分から貴族たちの合唱が加わる。演奏会用の編曲では、この合唱は、トロンボーン、クラリネット等で示されるが、この曲の性格付けのためにも、歌詞（訳：筆者）を提示しておこう。

Gesegnet soll sie schreiten, die lang in Demut litt! Gott möge sie geleiten, Gott hüte ihren Schritt!	祝福を受けて歩まれよ 長い屈辱を過ごされた公女 神が彼女を導く その歩みを見守り給え
Sie naht, die Engelgleiche, von keuscher Glut entbrannt!	天使のような公女が近づく 汚れ（けがれ）なき情熱によって
Heil dir, o Tugendreiche! Heil dir, Elsa von Brabant! Gesegnet sollst du schreiten!	万歳、気高い人！ 万歳、エルザ・フォン・ブラバント！ 祝福を受けて歩まれよ！

原曲はそのまま第5場に入るが、演奏会用編曲では、変ホ長調の和音を響かせて終結する。

3. ミシシッピ組曲 (グローフェ)

グローフェ (Ferde Grofé : 1892~1972) は、ニューヨークで生まれた、アメリカ合衆国の作曲家、ピアニストである。ガーシュインの『ラプソディ・イン・ブルー』を、本人に代わってオーケストラアレンジしたことでも有名である。

ミシシッピ組曲は副題に **Tone Journey** (音の旅) と書かれている。全4曲で構成され、ミシシッピ川の源流から河口までの様子が描かれている。今年生誕200年を迎えたスメタナの『モルダウ』と似たコンセプトである。

さて、ミシシッピ川は、カナダと国境を接し、五大湖の西側に位置するミネソタ州北部のイタスカ湖が源流となっている。その後10の州の州境を全長3779km（富士山の”高さ”の約1000倍）にわたって南下し、メキシコ湾に流れ込む。途中、ミネソタ州の州都セント・ポール、ミズーリ州のセント・ルイス、テネシー州のメンフィスなどを通過し、ルイジアナ州のニュー・オーリンズを河口としており、まさにアメリカを縦断する川である。

先に言うておくが、第2曲と第4曲には、昭和世代には懐かしいフレーズが含まれている。川はアメリカを“縦断”するが、懐かしさは“横断”してニューヨークに向かう。

では、音の旅を始めよう。

第1曲 父なる川 (Father of Waters)

金管楽器によるコーラルがこれから始まる大旅行の除幕をしているようだ。

弦楽器などによる川の水面の様子に乗せてホルンがのどかな風景を表現している。中間部では人々に目をやると伺える街の喧騒とも言える様子が描かれているようだ。

第2曲 ハックルベリー・フィン (Huckleberry Finn)

ハックルベリー・フィンは、アメリカの作家マーク・トウェインの長編小説『トム・ソーヤの冒険』（舞台はミズーリ州）にて主人公の友人として登場する。また、その続編である『ハックルベリー・フィンの冒険』では、ミシシッピ川を奇想天外に旅する様子が描かれている。この曲はそんなハックの快活な様子を表現している。

第3曲 古いクレオールの日々 (Old Creole Days)

クレオールとは、ルイジアナ州近辺に移住したフランス人及びスペイン人並びに彼らの血を受け継ぐ者たち、またはその文化のことである。血の故郷を遠く想うような優しい音楽が印象的である。2つの和音を行き来する弦楽器の伴奏から、子守歌のようにも聞こえる。

第4曲 マルディ・グラ (Mardi Gras)

マルディ・グラはフランス語で「太った火曜日」という意味である。キリスト教の断食の期間を前にたらふく食べて騒ごうという「謝肉祭」の最終日のことである。いよいよミシシッピ川の旅も終結。河口となるニュー・オーリンズで催されるマルディ・グラは、リオのカーニバルなどとともに世界有数の謝肉祭となっている。

4. テ・デウム ハ長調 作品番号45 (ブルックナー)

ブルックナー (Josef Anton Bruckner : 1824~1896) は、オーストリアの第3の都市リンツの郊外で生まれた、今年生誕200年を迎えた作曲家、オルガニストである。

テ・デウムとは、Te Deum laudamus (神なる御身を我らは讃え) というテキストで始まる29連 (段落) の聖歌で、キリスト教の流派 (カトリック、正教会など) を問わず、普遍的に歌われる。この歌は、三位一体を讃えるもので、祝典のために作曲されることが多い。三位一体とは3つの位格 (父なる神、子なる神 (イエス)、霊なる神 (聖霊)) が1つの実体を成す“真なる神”のことである。なお、日本の箱根神社の御祭神である箱根大神 (はこねのおおかみ) は、天孫ニニギノミコト、その妻コノハナサクヤヒメ、お二人の御子ヤマサチヒコの3柱の総称である。

曲は大きく5節に分けられている。それぞれについて、歌詞とともに紹介しよう。

第1節 Te Deum

いかにもブルックナー！というような、弦楽器の分散和音の刻みに導かれて、合唱が歌いだす。この弦の分散和音と合唱による強奏を、以下「冒頭曲想」ということとする。

Te Deum laudamus:	神なる御身を我らは讃え、
te Dominum confitemur.	主なる御身を讃美し奉る。
Te aeternum Patrem	永遠の父なる御身を
omnis terra veneratur.	全地は拝み奉る。

音楽が鎮まるとソリストが歌いだす。

Tibi omnes Angeli ;	すべての御使い、
tibi caeli et universae Potestates ;	天と地の力ある者らは
Tibi Cherubim et Seraphim	ケルビムもセラフィムも
incessabili voce proclamant:	高らかに歓喜する。

合唱が祈るように受け継ぎ、続けて冒頭曲想により力強く展開する。

Sanctus, Sanctus, Sanctus,	聖なるかな 聖なるかな、 聖なるかな
Dominus Deus Sabaoth.	万軍の主である神
Pleni sunt caeli et terra	天と地は御身の
majestatis gloriae tuae.	偉大なる栄光に満ちる。
Te gloriosus Apostolorum chorus:	栄光ある使徒ら、
Te Prophetarum laudabilis numerus:	栄光ある預言者ら、
Te Martyrum candidatus laudat exercitus.	清き殉教者らが御身を讃える。
Te per orbem terrarum	全地の聖会は
sancta confitetur Ecclesia:	ともに御身を讃える

弦楽器がディミヌエンドすると、合唱が厳かに「三位一体」を唱える。

Patrem immensae majestatis;	永遠なる大いなる父、
Venerandum tuum verum et unicum Filium;	そして尊いまことのひとり子、
Sanctum quoque Paraclitum Spiritum.	慰め主である聖霊とも。

再び冒頭曲想が現れるが徐々に弱まり、無伴奏となった（下枠の6行目：aperuisti）のちに、7行目（Tu ad dexteram）から冒頭曲想により第1節を歌いきる。

Tu Rex gloriae, Christe.	栄光の王であるキリストよ、
Tu Patris sempiternus es Filius.	御身こそ父の永遠の御子。
Tu ad liberandum suscepturus hominem, non horruisti Virginis uterum.	御身は人々を救わんとして 臆すことなくおとめの胎（はら）に宿り
Tu devicto mortis aculeo, aperuisti credentibus regna caelorum.	死の棘(とげ)に打ち克ち 信ずる者のために天国を開いた。
Tu ad dexteram Dei sedes, in gloria Patris.	御身は神の右に座し 父の栄光のうちに
Judex crederis esse venturus.	裁き主として来られることを信ず。

第2節 Te ergo

ソリストによる曲である。

Te ergo quaesumus, tuis famulis subveni: quos pretioso sanguine redemisti.	御身のしもべを救いたまえ、 御身の尊き血によりあがなわれた者らを。
---	--------------------------------------

第3節 Aeterna fac

冒頭曲想により始まる。

Aeterna fac cum sanctis tuis in gloria numerari.	永遠の栄光のうちに、彼らにより 諸聖人と共に列せられるように。
---	------------------------------------

第4節 Salvum fac

ソリストが中心となり、合唱と掛け合いながら静かに曲が進行する。

Salvum fac populum tuum, Domine, et benedic hereditati tuae.	御身の民を救いたまえ、主よ 御身の世継ぎを祝福し
Et rege eos, et extolle illos usque in aeternum.	そして彼らを治め 永遠に高めたまえ。

全終止に続いて、冒頭曲想が現れるが、途中（下枠の4行目：Dignare）から、弱音で語り掛けるような曲想となる。

Per singulos dies benedicimus te.
Et laudamus nomen tuum in saeculum,
et in saeculum saeculi.

Dignare, Domine, die isto
sine peccato nos custodire.

Miserere nostri, Domine,
miserere nostri.

Fiat misericordia tua, Domine, super nos,
quemadmodum speravimus in te.

我らは日々御身に感謝し

御身の名を限りなく

ほめ讃える。

主よ、今日も我らを守り

罪を犯すことを避けたまえ。

我らをあわれみたまえ、主よ、

我らをあわれみたまえ。

御身のあわれみを与えたまえ、

御身を頼む者らの上に。

第5節 In te, Domine, speravi

いよいよ、終曲となる。歌詞は1連(2行)しかないが、壮大な構成となっている。まず、ソリストが歌いだす。

In te, Domine, speravi:
non confundar in aeternum.

主よ、われ御身に頼ります
その望みは永遠に揺るぐまじ。

合唱が強奏で最終行を受け継いだ後、構成上はフーガに突入する。



その後、コーダに入り、ソリストが歌いだす。このモチーフは、その後合唱に引き継がれるが、作曲者の交響曲第7番の第2楽章の主題との関連性が指摘される場所である。



無伴奏による合唱の力強いコーラルの後、ファンファーレに導かれて大団円を迎える。

なお、この曲の歌詞及び対訳については、当団の第48回定期演奏会(国分寺市市制50周年記念演奏会:2014年5月24日開催)において配布したパンフレットに記載されていた、ドヴォルジャーク作曲『Te Deum』の曲目解説(藤本崇氏著作)から転記したものであることを申し添える。

以上